表紙
小林英樹「黒い線と文字が作る世界」
紙に油絵具、ジャパン・ゴールド・サイズ、タイプライター
1983年

表紙絵の解説

小　林　英　樹

1983年はいわばぼくの造形的表現者としての始まりの年だ。1960年代からアメリカの世界戦略に呼応するかのようにアメリカの美術が怒涛のように日本にも流れ込み、「現代美術」という特殊な領域を構築し、「現代美術」は世界を計る基準であり、揺るぎない座標軸となった。その座標軸の上に自らの必然的根を張ることができず、かといって確たる独自の世界を見出すこともできず、ぼくは根なし草のように感覚的な次元だけで焦燥感に駆られて動いていた。

1983年は大阪現代美術センターで二室を借り、はじめて熱中して制作した二十数点の大作を並べた。そのときに自らの表現を規定するものを「色彩行為」(DEEDS of COLORS)とし、以来、立脚点をそこにおいて制作と発表を続けてきた。

1983年は、紙に描いた（を使った）作品の枚数も多く、ひらめいたものを次々に紙を使って表わしていった。タイプライターで同じアルファベットを一面に、それを何十枚も打ち続けたりもした。音の響きを思い浮かべながらアルファベットを並べ連ねた、自己完結型、自己満足的な「詩作」も結構あるが、なんといっても自分がいつまでも飽きもせず、単調な行為を続けることに意欲を覚えていたことが、いまになってみれば真似のできない「脅威」でもある。昔のものは、あとで見て捨てたくなるものと、残しておきたいものとがあるが、1983年のものは残しておきたいものが多い。

そんな一連の紙を使った行為の中に、今回表紙に使ったものがある。このシリーズは一日で何十枚も一気に作り、それで終えてしまったものだが、タイプライター用のSPIKAという透かし文字が入ったコットン紙に、油絵具のアイボリーブラックのポピーオイルを新聞紙の上にのばして抜き取り、ジャパン・ゴールド・サイズ（箔を貼るときに使う黒蜜色の樹脂）で練り直し、それを使って単純な行為としての点や短い線をひき、乾燥した後、「詩的な響きがする」文字の羅列をタイプライターで打って組み合わせたものである。白い紙に、真黒な絵具、絵具から滲みだした樹脂の褐色と紙の繊維とが作り出す表情、そのままビニール袋に包んで箱の中に眠っていたものである。